新潟大学教育学部附属教育実践研究
指導センター研究紀要，6 （1987）

＝教員養成における＝

「絵画指導上の教材開発例」

青 柳 三 郎*

はじめに

これまで2回にわたり、教材開発に関する研究を報告してきた。現状の美術指導で問題と思われることは、子供にとって造形的興味を含んだ教材が用意されないこと、伝達がうまくなされないこと等である。

今回は、かかる問題を解決する手掛かりを探ろうとするものである。

本文の構成は、第1章で、学生の絵画に関する意識や理解度を調査し、その結果を教材開発のより所とした。第2章では、筆者の作成した9つの教材開発例と、それを学生が実習した作品例を挙げ、効果を確かめた。

第1章　学生の絵画に関するレデネス調査

新潟大学教育学部小学校教員養成課程2年生で、図画工作科教材研究を受講している学生330名を昭和61年4月下旬に3回にわたって、下記の主旨と内容・方法で質問紙による調査を実施した。

1. 主　　旨

学生の絵画制作に関する既習内容を知り、教師としての資質を培うために、必要な教授内容を探る。

2. 調査項目と内容（調査の一部のみ記載）

［質問1］　図画工作科で好きな領域は何か。　(1)絵画　(2)版画　(3)彫塑・彫刻　(4)デザイン　(5)工作・工芸（該当する項目には○印を付ける。以下同じ。）

［統計結果］　好きな順位から。　絵画45.1％　工作・工芸24.0％　デザイン16.9％　彫塑・彫刻7.2％　版画6.8％

［質問2］　描画では線描も彩色もほぼ良く出来ますか。　(1)出来る。　(2)出来ない。

［統計結果］　出来る者20.4％　出来ない者79.6％

［質問3］　描画で形を明瞭に表現することが出来ますか。　(1)出来る。　(2)出来ない。

［統計結果］　出来る者22.9％　出来ない者77.1％

［質問4］　描画で主題を決めて表現しますか。　(1)決める。　(2)決めない。

［統計結果］　決める者44.3％　決めない者55.7％

［質問5］　絵画表現が楽しく最後までやり通しますか。　(1)やり通す。　(2)挫折する。

［統計結果］　やり通す者45.0％　挫折する者55.0％

［質問6］　小学校の女子1人をモデルに想定し、全身像を下の画面（省略）に線描しなさい。

［統計結果1］　創造的表現をした者26.2％　概念的表現の者23.7％　普通の者48.9％　その他1.2％

［統計結果2］　続き線でかいた者41.3％　継ぎ足し線になった者57.5％　その他1.2％

＊　新潟大学教育学部

［質問７］　水彩絵の具には透明水彩絵の具と不透明水彩絵の具のあることを知っていますか。
(1)知っている。　(2)知らない。
［統計結果］　知っている者 36.2％　　知らない者 63.8％
［質問８］　色の性質の三要素を次の空欄に記入しなさい。　(1)　　(2)　　(3)
［統計結果］　理解している者 1.8％　　理解していない者 98.2％
［質問９］　補色について説明しなさい。
［統計結果］　理解している者 8.2％　　理解していない者 91.8％
［質問10］　色料の三原色名を記入しなさい。　(1)　　(2)　　(3)
［統計結果］　理解している者 51.4％　　理解していない者 48.6％
［質問11］　手元の鉛筆をモデルとし、立体感が出るように面の明暗や陰影を考えて、下の画面（省略）に鉛筆で表現しなさい。
［統計結果］　立体的表現が出来る者 30.7％　　出来ない者 69.3％
［質問12］　この教室の後から前を見ていると想定し、下の画面（省略）に一点透視描法で表現しなさい。表現出来ない人はかかなくてよい。
［統計結果］　表現出来る者 28.0％　　表現出来ない者 72.0％

（備　考）
① アンケートで未解答者や不明な解答が小数あったが、その他の項に集計した。
② 集計は美術科学生の前野隆史、稲尾弥生、速水雅子、今井直美が当たり、質問６と11は筆者が当たった。
③ 統計図表で解答数を示すべきであるが、紙面の都合上、回答の比率のみを提示した。

3. 調査結果から見た問題点
(1) 描画表現で、かく対象を意思通り明瞭に表現することを苦手とする者が、７割ぐらいと多い。
(2) 主題を不明確のままかき、途中で挫折する者が半数ぐらいいる。
(3) 創造性に欠け、概念的表現になった者と普通の者を合わせて、７割強である。
(4) 線描の線に迷いが見られ、継ぎ足しの線でかいた者が、６割弱いる。
(5) 色の性質や材料の理解不足が、顕著に伺える。
(6) 立体的表現や透視描法が巧く出来ない者が、７割前後いる。

4. 問題点の要因を予想
(1) 学生は、受験と関係しない絵画制作を軽視する傾向がある。
(2) 絵画制作の技法（表現の仕方）が分からず、興味を失ったり劣等感を持っている。
(3) 義務教育時代に基本的、基礎的内容の修得が不完全である。

5. 今後の教授指導内容
(1) 学生自身の資質を培うこと。
(2) 指導者としての基礎的・基本的な表現能力を付ける。特に、立体的に表現する力、創造的表現力、技術力を培うことが必要である。
(3) 教材開発の方法を交えながら、表現力を付ける。

6. 今後の教授指導理念

(1) 造形的興味を持たせて表現力を付ける。
(2) 段階的に教授する。
(3) 指導に役立つ教材開発の方法を体得させる。

第2章 教 材 開 発

【教材開発1】 創造性と個性

創造的表現という言葉で、創造の語義を厳密に解くと、何もないところから新しいものを創り出すことです。しかし、実際の表現活動では、今までのものを参考にして新しく作り変えることも含めて、創造的表現とします。

義務教育でとらえる創造性は、古来から伝授されてきた文化遺産の生産手法を、もう一度経験させることや、文化遺産を基にしながら、新しいものを創り出させることも含めて考えるのが自然です。例えば、未開人の行った野焼き、はにわ、トーテムポール等の作品を作らせることも、創造的表現といえます。

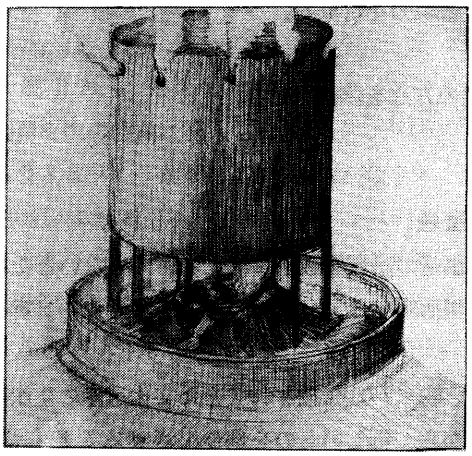
創造的表現の反対語は模倣的表現です。人間は模倣を試み、言葉や習慣を学んで、社会生活を円滑に過ごすことが出来るのですから、模倣も大切な学習です。ただ、子供が表現をする場合の模倣は、模倣のための模倣でなく、他の表現を参考にするが、自分の考えで創り出すことを大切にしなければなりません。子供達には、無から有を生み出させるのでなく、もっと柔軟なとらえ方で良いのです。要は、今までよりも新しいもの、変わっているもの、珍しいものを表現させることが創造的表現といえるのです。

個性とは、その人の特性、持ち味等と解釈してみます。同じ歌を歌っても、歌手によっては、歌唱内容に持ち味がそれぞれ異なることと、類似しております。今、年齢、性別、環境、知能、心理、健康、技術、用具、材料等の異なった立場にいる人々を対象として、同一モデルの顔をかいてもらったとしますと、各人が各様に、一人ひとりの持ち味を持った表現をするのです。ところが、教室でかく絵の中に全員が同じ顔（内容）をかいてしまうことが稀にあるのです。そうであってはならないのです。子供達は生来、個性的表現をするものだということを踏まえて、一人ひとりの持ち味を認めていくことです。

上記の主旨を理解した上で、次の例題をしなさい。

［例題1］ 創造的表現練習

(1) 三原山の火山噴火を、消し止めたり静めたりするのに、あなたはどのようなことをしたいか、空想してかきなさい。
(2) 自分だけの考えでかき、人直似をしない。
(3) 作品を見る人が、かいた内容を理解できるように明瞭にかく。
(4) 黒色各種鉛筆のみとする。
(5) かいた内容の要点をメモする。



（作者の解説）火山の回りに、鉄の枠を張り巡らせ、上のほうは円筒形の棚をかぶせる。

［解説］　この例題は、創造性をねらうため、空想的な内容を表現させるように意識的に設定した。このように超現実的表現をする場合は、内容を見る人に具象的に示さないと、表現意図が確かに伝わらない。

この例題での表現内容として、噴火口の上から何かでふさぐ、流れ出る溶岩を利用して新島を造る。水や消火剤で噴火を消す、宗教的祈りで噴火を静める。噴火山の中を透視的に表現して意味をかき入れる等と多種多様なものであった。

この種の題材は取り付きにくいが、かき始めると次々にイメージが湧いてきて、楽しくかけるものである。

［例題２］　個性的表現練習

下の図１には、現在の自分の顔を思うまま線描する。図２には「泣き女（昔、ローマでは悲しい儀式のとき、泣いてもらう女の人がいた）」、図３は「10ｍの高飛び込み台からプールに飛び込む途中の表情」、図４は「睨めっこ遊びでの表情」を想定して線描しなさい。

その他、自分が老人になったとき、怖かったとき、嬉しかったときの表情等、表現意欲を喚起させるテーマを与えると良い。

図１

図２

図３

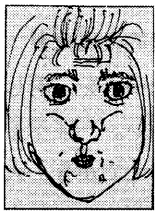


図４

［解説］　この作者に限らず、図１のように自分の思うままかきなさいと言われても、無感動で小さくしか表現しない傾向がある。ところが、図１と比べ図２、図３、図４を見ると、指示による刺激のためか、作者の表現意図なり心的興奮が伝わってくるのが分かる。このように個性的表現を引き出す場合、作者への刺激があると効果的であることが分かる。

【教材開発２】　言葉による造形的用語の伝達

子供が表現を進めるとき、教師は色々な手段で働きかけをします。その中でも、もっとも多く、しかも日常的に使うのが、言葉による伝達です。このように考えると、言葉の内容について、よほど吟味して使わないと、正確に伝わらないのです。曖昧な内容のままで子供に伝えると、子供は思わぬとらえをし、理解に苦しみ、表現活動を狂わせたり、鈍らせてしまいます。

絵画指導における言葉の伝達上、最も重視しなければならないことは、言葉の内容に造形的用語を組み入れることです。（低学年では、造形的用語に代わる意味を含んだ用語）例えば、◎あれよりもこれぐらい大きい。◎この形が繰り返されている。◎線が途切れないで続いている。◎その線がこれぐらい太い（細い）◎それよりもこちらの明るさがこれぐらい高い（低い）。◎こちらの方向に、ここまで動いている。◎口を一杯に開け、大きな牙の先がとがっている。◎走っている人の髪が、真横に靡いている。◎ぶどうを採るために、普通の長さの２倍ぐらい、手を伸ばしている感じがする。◎目を良く見ると、上瞼と下瞼では線のカーブの方向が違う。又、正面向きの目の瞳を良く見ると、上瞼に少し隠れるように重なっている（高学年）等のように、下線で示した造形的用語で、具体的に伝えることです。

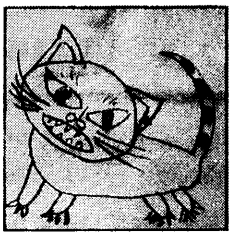
このような配慮をしないで、△ばらばらになった線。△怖そうな口。△走っているような髪。△ぶどうを採っている感じ。△いきいきした目付き等のように、造形的用語を持たず、具体的内容に迫らない伝達では、子供にどのように解釈されても、仕方がないのです。

このような主旨を踏まえ、次の例題により、造形的用語を使った伝達方法を、体得しなさい。

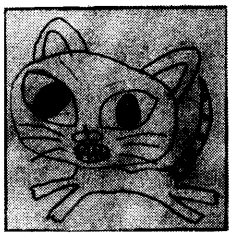
［例　題］

前文の主旨を良く把握してから、次の要領で実施する。

1. ２人で１組となり、１人が教師（実験者）、１人が小学校５年生（非実験者）の立場になったつもりで実施する。
2. 教師は、図１に印刷してある図形を見て、その図形から感受される造形的特長を、言葉だけで子供に伝え、図２にかいてもらう。図１の絵には造形的な特長が幾つかあるが、細部のことよりも、大まかな特長を捉え、言葉を吟味して選択し発問をする。細部にわたる指示をすると、子供（被実験者、以下同じ）の個性的表現が損なわれるので、造形的内容の特に強いものを見付けて、発問をするとよい。
3. 子供には原図の絵を見せてはならない。
4. 教師の発問をそのまま、T_1、T_2、のように、子供の発言をC_1、C_2、のように順次記述する。
5. 図１と図２を対比し、この実験の主旨がうまく達成されなかった箇所を、どのような発問にすればよかったか、問題となった発問と同行の位置に反省点を記入する。



原図（図１）



生徒役作品（図２）

教師役と子供役の発言	教師役発言の反省点
T_1 猫をかいて下さい。 C_1 猫だけなんですか？ T_2 はい。 T_3 顔について言います。顔の大きさは、体の割りに大きくて、右下がりに斜めに傾いています。 C_2 顔はどちら側にあるの？ T_4 左側です。 C はい。 T_5 では次に、目は大きくて、少し釣り上がっています。眉毛は薄くて髭もあります。口を開いていて、とがった歯が4本見えています。 C_3 上4本、下4本？ T_6 はい。噛み合わせがずれています。 T_7 次に、鼻は双葉を逆さにした形で、鼻の穴が大きいです。目は三角の形、2つです。 C 体は？ T_8 体は頭の割に小さくて、足が4本で、前足は前向き、後ろ足は後ろ向きです。 C_5 しっぽは？ T_9 しっぽは長くて、三日月形で黒い縞があります。 T_{10} 以上です。	P 1 T_3で、顔が大きいことを強調したのでアンバランスな猫になってしまった。「顔が異様に大きい」「猫の割に顔が大きい」と言えば良かったのかもしれない。 P 2 T_5で、「歯が8本」とか「噛み合わせがずれている」とか、そういう細かなところは言わないほうが良かったのではないだろうか。 とにかく、詳細まで言い過ぎて、似てはいるが、子供のかきたいこと、個性が無くなってしまい、良くなかったかも知れない。 しかし、私が支離滅裂な発言をしている割に、良くかいてくれたと思う。

［解　説］

1. 伝達の方法には、言葉、動作化、視聴覚教材等沢山ある。この例題では言葉だけを使って、表現対象の特長を伝えることが出来るかを試したものである。

ここで、注意しなければならないことは、指導者は子供に対し、表現対象の形態や色彩、質感等の客観的事実を正確に伝え、ありのままを転写させるのではない。表現対象から感じ取られる造形的特長を抽出し、対象の事実を伝えるのではなく、真実を伝えるのである。若し、客観的事実を写実的に伝えようとすると、対象の細部にまで伝えたくなり、子供の個性的表現や、自由な裁量による表現を損なうことになる。

2. 具体的に図1の伝達方法例を述べてみる。図1にかいてある「猫」の造形的特長は、①顔は前向きで体は横向きである。②顔は画面に向かって左斜めにあり、大きい。③大きな目は釣り上がっており、髭がぴーんと張っている。④しっぽは横縞模様が付いており、ぴんと上に伸ばしている。⑤4本の足には、とがった爪が伸びている、等が挙げられる。

今、この図形（原図）についての例示をしたが、これが実物の猫であっても、これぐらいの特長について、関心を向ける話し合いをしないと、かくイメージが浮かばないのである。単純に「猫」をかきましょうでは、自由表現をさせているようであるが、実は、何をどのようにかいたらよいか分からないので、子供にとっては不自由なのである。

以上のように、指導者があらゆる造形的表現をさせるときは、いつも対象から感受される造形的要素の特長を見取って、話し合わせることが大切である。

3. 上記例題を実施した教師役の学生の発言内容と、子供の役になって制作した学生の作品を検討すると、猫の造形的特長をとらえて発問をしているし、子供役の学生も個性的表現をしている。初めての発問練習としては、的を得た学習を進めたいといえる。反省欄P_2で、個性のことを気にしているが、かかれた猫は原図の猫と同じでなく、作者の個性的表現意図が伺えて良いと思う。

【教材開発３】　お人形的人物表現の打破

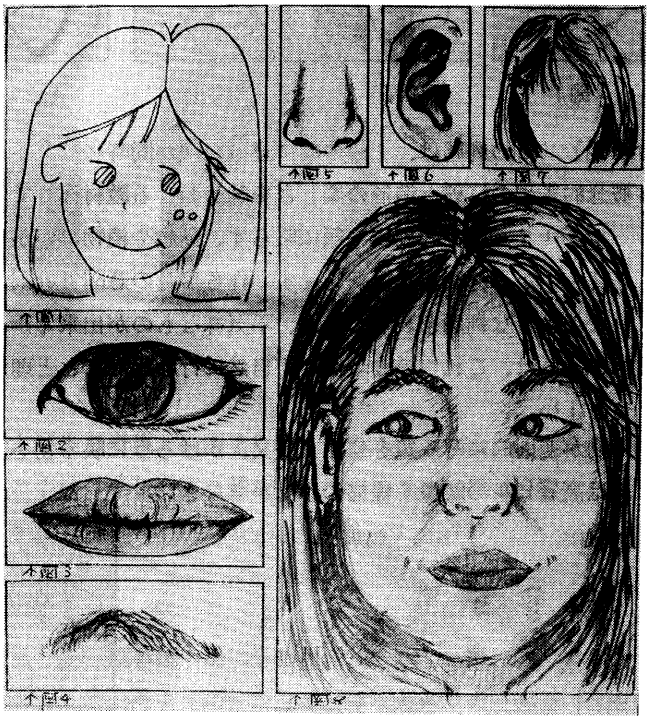
小さいときから、お人形的な人物が印刷されたぬり絵に色を塗ることを続け、大人もその形から色がはみ出さない塗り方を褒め続けると、子供はいつもお人形的な表現をし、なかなか創造的な人物表現が出来ないものです。既にかかれた形を倣うことが絵であると、幼児の脳にプリントされてしまったのです。又、大人の考えや表し方を気にし、大人の顔色を見て、大人の言う通りにかくことを続けることも、やはり固定化させ、概念的表現にさせるのです。これらは、自ら感じたことを自ら楽しんでかくという、主体的表現から程遠いもので、是非打破しなければなりません。

今、〝お絵かき〟と〝絵をかく〟ことを区別しますと、概念的な表現活動がお絵かきで、創造的な表現活動が絵をかくことなのです。教室での活動は絵をかく態度が大切です。

お人形的な人物表現を打破する方法は色々ありますが、ここでは対象とする人物を良く観察することにより、創造的表現に迫る指導の手立てを試みます。次の例題に従い、人の顔を創造的に表現させるための資料を作成しなさい。

［例　題］

1. テーマ「友人の顔」
2. 対象学年を小学校４年生とする。
3. 資料作成のねらいは、対象を良く観察すると今までと違った形が認識され、表現内容が豊かになることを理解させるため。
4. 図１には、ぬり絵や漫画から抜け出したような顔。図２には、友達の目（片方）を良く観察して気づいた形を詳しくかく。図３には同じ観察方法で口、図４には鼻、図５には眉毛(片方)、図６には耳、図７には髪（型や毛並み）をそれぞれかく。最後の８には、友達の顔全体を見ながらかく。



［解説］　この例題は、顔の各部分毎によく観察して、気付いた形を順次スケッチし、それらを最後に総合して顔に仕上げる手法を取らせたものである。この作者は、この例題による資料作成の主旨をよく理解しているため、図１では漫画調に誇張した顔を表現し、図８の生き生きとした顔の表情との違いを、子供達に理解させる資料作りを果たしている。

【教材開発４】　変わった表情

表現が固定化し表現意欲がないとき、その打開策として、造形的興味を持たせながら、変わったアイデアで、創造性を回復させることが出来ます。そのようなアイデアを含んだ教材を、次の要領で作りなさい。

［例題１］

(1)　画面縦のほぼ中心軸を境に、左右に違った顔が同時に存在していると想像してかく、図１には〝正面と横〟、図２には〝男と女〟、図３には〝人と動物〟を線描のみでかきなさい。

(2)　画面横のほぼ中心軸を境に、上下に違った顔が同時に存在していると想像してかく。図４には〝正面と横〟、図５には〝男と女〟、図６には〝人と動物〟を線描のみでかきなさい。

図１

図２

図３

図４

図５

図６

［解説］　この例題は、１つの顔に違った顔が同時に存在する、ダブルイメージ的表現をさせ、顔の概念的表現の打破と造形の楽しさを味わわせる教材作りである。

ダブルイメージ的表現は顔に限らず、動物や植物等いかなる対象も使うことが出来る。又、画面を真ん中から分割する規制をせず、作者自身の意図で分割させるとよい。

このような例題を表現すると、不気味なものが出来るが、ギリシャやイタリアの古い彫刻や宗教的作品には、これらの表現がごく自然に行われたことと理解させ、勇気付け創作の喜びを味わわせるとよい。

(3)　物が変則的に写る鏡を想定し（又、かげろうに映る物を想像し）、図１には樹木の映像を、図２には高層ビルの映像を線描のみでかきなさい。

図１

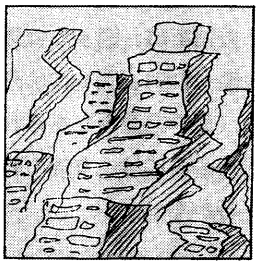
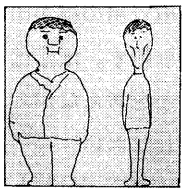


図２

(4) 太っている人と痩せている人を、1人ずつ、大げさに対比して線描しなさい。



［解説］ (3)の歪んだ鏡やかげろうは、現実にある、ごく自然な道具や現象である。ただ、教材として見落とし易いものである。又、(4)は対比を楽しく学ばせるための教材である。

［例題2］

曖昧な気持ちで仕上げたとするのでなく、主題を完全に達成するため、制作に当たって、かき足すだけでなく、削ったり、除去したり、切り落とす等して、構成し直す勇気を持つことを理解させるための資料を次の要領で作りなさい。

図1には、造形的感覚の感じられる女の顔を、色紙で作りなさい。地は画用紙の白をそのまま残しなさい。

図2には、図1と同じ作品を作りなさい。図2の作品を、凡そ数㎜幅の縦の帯に切り離してみなさい。切り離した帯の順序に従い、隣同士の帯を、2㎜位ずつ上下に移動させ、図3に貼っていきなさい。

完成後、図1と図3を比較してみなさい。

図1

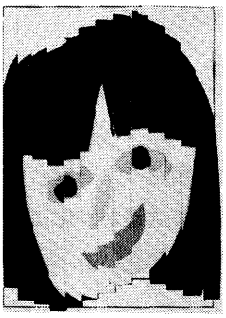


図3

［解説］ この例題では、顔の色、形を大げさに表現し、あまり細く分断させないとよい。この作品は顔の歪みが一層歪んで、最初に作った平板な感じのする顔から、ユーモラスな感じに変化させていてよい。

［例題3］

主題に添った表現内容で絵を完成した後、その絵を幾つかに分断する。分断した断片を、最初の絵と違った構成で、組み合わせてみる。このように、今までの表現方法と違う考えで構成の面白さを味わわせる資料を、次の要領で作りなさい。

(1) 図1に目、口、耳、鼻、眉、髪等を誇張した人の顔を、濃く太目の線だけで表す。

(2) 図2（省略）には、図1と同じ絵をかきなさい。（図2の画面には、分断した紙片で再構成しても、画面が変形しないように工夫して、切り取り用の線が印刷されてある。）

(3) 図2の作品を、切り取り線に従って切り離す。ばらばらになった9つの紙片を、上下左右に位置を変えて構成し直し、造形美が生じることを考えながら、図3（省略）の画面に貼り完成しなさい。完成後、分割前と分割後の作品を比較しなさい。

（備　考）　応用例としては、各自のテーマで、分割も自由にすると良い。

1－1　　1－2　　2－1　　2－2

［解説］　画面を分断しそれを再構成することによって、最初（左側の作品）の作者は、泣きそうな顔から怒った顔に変えている。右側の作者は、可愛い女性の顔から悪魔の女？に変えている。両方とも意味の反転を意図して創り上げたものと想像される。この他、白と黒のバランス構成等により幾つか創出来る。簡単のようであるが分割する前に、造形的思考を十分働かせないと、失敗する。

作品を分断するため、自分の思い通りにならない場合でも、珍しく奇抜で変わった構成が生まれるので、それをヒントとして、新しい表現への手掛かりにするとよい。

【教材開発5】　対象の影に着目する

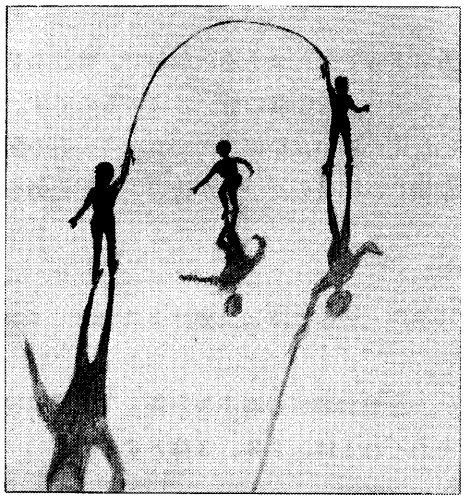
小学校高学年や中学生では、表現対象の影に着目して制作することは、極めて診しいことです。これは、子供達の観察能力の未発達による場合と、教師が気付かないで過ごす場合が考えられます。

そこで、観察能力のついた子供達が、影に着目すると、表現内容が豊かになり、興味を持って表現出来る教材を、次の要領で試みなさい。

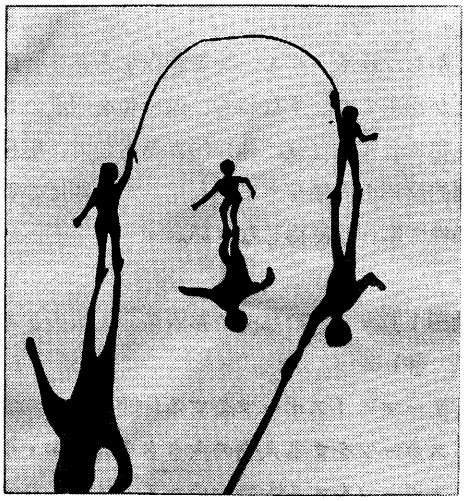
［例　題］

1. テーマ　「逆光に浮かぶ人達の影」
2. 教材作成の主眼は、人を影を主題にしてかいたことが分かるように表現する。
3. 教材作成の内容と手順　①大きい人を1人、中ぐらいの人を1人、小さい人を1人の計3人で構成する。②ポーズは、佇む、スポーツをする。道具を使って労働や仕事をする。③人物の細部にわたる表情や服の模様内容は省略し全身のシルエットとしてかく。④人物の全身像より、影の形が大きく長くなるように考慮してかくと、影を主題にしてかいたことが分かり易いと思う。⑤影の明度は、人物の明度より高くし、人物を黒く塗り潰すぐらいに暗くすると自然な感じが出る。⑥図1には黒色各種鉛筆で明暗による写実的な表現をする。⑦図2には、図1の作品を見て、図1の内容や構図に倣って、色紙により表現する。色の性質や機能を総合的に判断して制作する。特に明度差に着目して色紙を選定すると良い。色数は少なめにし、オーバー・デコレーションにならないように

する。⑧画面の向きは縦横自由とする。⑨制作時間は60分。



「なわとび」鉛筆で



「なわとび」色紙で

「演　奏」鉛筆で

「演　奏」色紙で

［解説］　鉛筆で影の自然性を出すには、影が遠くなるほど明度を高くするとよい。又、1例として、光が真上から落ちるよりも、斜め後ろからくる逆光の位置で構図をとらえると、幻想的になりやすい。

図2の色紙による表現では、人物像の明度を低く、影の明度を高くすることに留意して配色するとよい。

【教材開発６】　色彩による遠近法

色彩の性質を理論通りに解釈しますと、明度の低い色は後退し、明度の高い色は前進します。私達はこの理論にしたがって、形の遠い色を明度の低い色で、近い色を明度の高い色で表すことが多いのです。

しかし、絵やデザイン等を制作するとき、配色の仕方によっては、全く逆の配色で、遠近感を表すことが出来ます。すなわち、遠い色を明度の高い色にし、近い色を明度の低い色にするのです。これは、色の名視性（視認性）によるもので、配色の心理的反応が働いた結果なのです。今、この配色の心理的反応の効果をうまく利用して、明度の低い色が前進し、明度の高い色が後退する配色例を、次の条件で制作し感得しなさい。

［例題１］

（条　件）

1. テーマ　「スポーツをする仲間」
2. スポーツをする人物の大きさを大・中・小とし、それぞれ１体、２体、３体とする。
3. スポーツをする動勢が分かる人体表現をする。
4. 色紙、鋏、（カッター）、糊を使う。
5. 小さい人物を明度の高い色、中ぐらいの人物は明度のやや高い色、大きい人物は明度の低い色を、有彩色の中からそれぞれ１色ずつ選択する。
6. 地の色は画面の白をそのまま残しておく。
7. 人物を構成するとき、重ねても良いし拡散させても良い。各自のイメージに従って工夫すると良い。

   この例題の意図は、色彩による遠近感の習得であるが、主題を達成するための構成や配色を工夫し、スポーツをする動きを表現することも要求される。
8. 色紙から形を切り取るとき、短時間で仕上げる技術練習のために、下図にかいた線にそって切るのでなく、下図をかかないで、直接色紙から形を、切り取ることが望ましい。形の像が頭に表象されていれば、下図をかかないで直接色紙から形を円滑に切り取ることが出来る。線描をするとき消しゴムを使わないでかく技法と類似している。
9. 時間は90分とする。

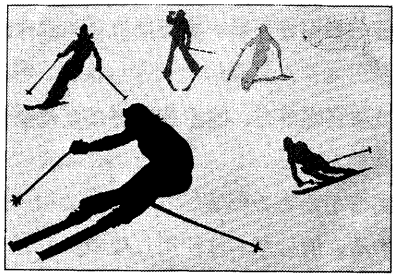
［例題２］

テーマと主題は例題１と同じであるが、配色については全く逆の発想で制作する。すなわち、形の遠い色ほど明度の低い色とし、近い色を明度の高い色にする。次の条件に従って、例題１の作品と対比して作り、感得しなさい。

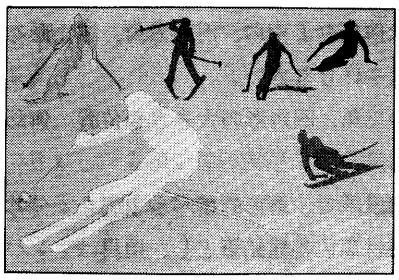
（条　件）

1. 主眼や人体の数と種類、用具、構成、技法、時間等は例題１に準じる。
2. 例題１の主題や構図と、ほぼ同じく表現する。配色で色の選択が例題１と大きく変わるので、例題１の形より多少変化が生じてもよい。
3. 地色の明度を最も低く、小さい形の人体から順次明るくし、大きい人体の明度を最も明るくする。

大・中・小の人体にそれぞれ1色を使用し、地色にも色紙を貼るので、合わせて4色を選択する。



例題1



例題2

［解説］　明度差を明確に区別すると、例題の主旨である色による遠近感が出易い。

【教材開発7】　構成の多様性と構成練習

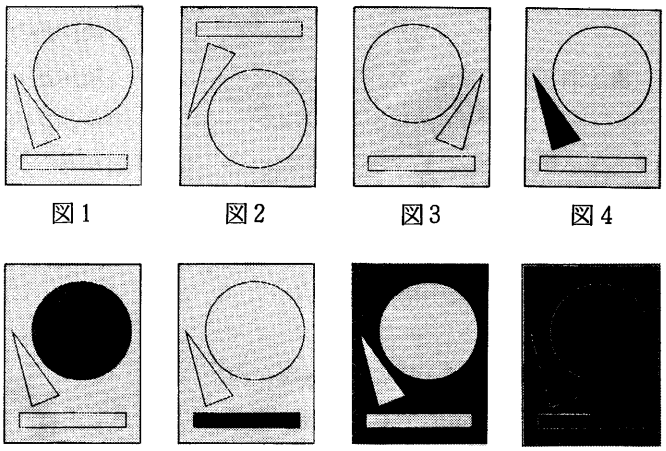


図1　図2　図3　図4

図5　図6　図7　図8

上の全ての図形には、同じ大きさの円、長方形、三角形が1つずつかき込まれています。

図1は他の図形の原形であり、図2は原形の上下を反転したものです。以下同様に原形の左右反転、三角形の黒塗り、長方形の黒塗り、地の黒塗り、白黒反転を施したものです。

このように、円と三角、長方形等の単純な形を構成しても、多種多様な図形が出来、それぞれに造形上の意味や感じが異なってきています。例示した他にも、形の大きさや位置、無彩色の明度等に変化を加えれば無数の構成を生み出せます。

このようにして出来た無数の作品は、全て美しくはなりません。

我々は、我々の美的感覚に合うイメージや考えによって、構想を練り、試行錯誤を重ね、自分の能力と対応しながら制作を根気よく重ねていくのです。最後、自分にとって満足のいくまで徹底的に追求し、完成したものが、美的な作品として生き残るのです。

この主旨を把握した後、次の課題により表現しなさい。

［例　題］

次の条件内で構成練習を試みなさい。

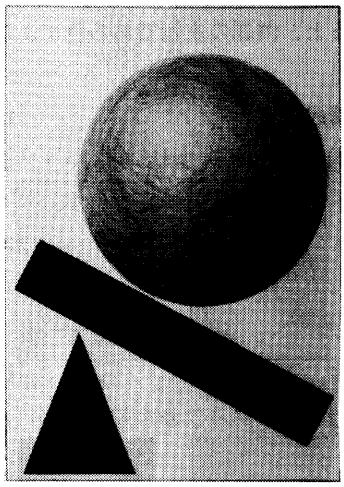
(1) 例示作品のように、円と三角、四角形をそれぞれ1つづつ作り、右の画面に自分の創作による構成作品を作りなさい。

(2) 円や三角、四角形の大きさや位置、無彩色の明度、技法（塗り方、陰影等）等に変化をつけて表現する。

(3) 構想段階で、造形的秩序や主題を十分考えてから、制作を始める。

(4) 描材は黒色各種鉛筆とし、用具はコンパスと定規とする。消しゴムは使用しない。

(5) 下の画面（省略）には、構成練習をした中から2例を選択しかきいれる。



【教材開発例8】　創作文（物語、童話、詩等）の絵画表現について

どのような創作文（物語、童話、詩等）でも、それを絵画に表現することは、他の絵画表現態度と変わりません。ただ、実物を見たり直接体験をしないで、想像による表現形式によることが他と異なるだけです。

即ち、構想や計画（主題の設定、表現内容の選定、表現の形式や技法の設定等）の方法は、対象を見ながらかく絵の場合と同じです。

次に例示する、民話「笠地蔵」を絵画に表現する例題は、あらゆる創作文（話）の絵画表現に通用するポイントを持っていますので、よく読んでから下の画面に黒色各種鉛筆で表現しなさい。

［例　題］

下に載せた、日本の民話「笠地蔵」は、紙芝居の16場面の話をそのまま記述したものである。最初にこの民話の全部を読んで、その時代、登場人物とその格好、地蔵の数や様子、場所、季節、気候、登場人物の行為や心情等を理解する。

1. 場面の選択

それらの場面の内で一番表現したい場面を、一つだけ選択する。

自分が選択した場面の絵画表現をするにあたって、次の観点から造形的な表現構想を練る。

2. 表現主題を決める。

（例） ①登場人物の様子や行為、表情を主題とする。②登場人物の１人の様子や行為、表情を主題とする。③六地蔵様の様子や行為、表情を主題とする。④六地蔵の一つの様子や行為、表情を主題とする。⑤野外の風景（雪景色）を主題とする。

3. 画面構成での形や大きさ、色を決める。

（例） ①主題を大きく広くし、目立たせる。②主題を小さくし、主題でない内容を広く取って、主題を目立たせる。③主題とする色を濃くし、目立たせる。④画面の背景を暗くし、主題を明るく目立たせる。

4. 表現形式を決める。

（例） ①具象的とする。②装飾的にする。③半具象的にする。

5. 時代、国、性別、年齢、風俗等の考証をする。

6. 鉛筆による技法を決める。

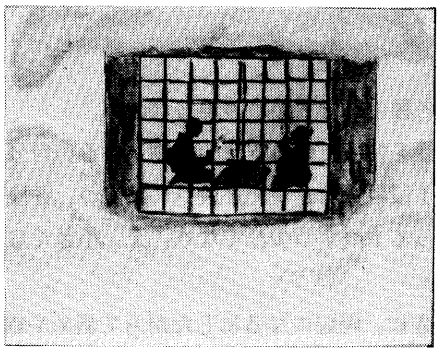
（例） ①線の太さのみを考慮する線画とする。（ドローイング的手法による。）②面を平らに塗り潰し、ペインテング的手法による。③点描による表現とする。④面の明暗に変化を付け、立体的にする。⑤その他可能な手法を用いる。

ここで、紙芝居「笠地蔵」（昭和48年童心社発行・松谷みよ子民話珠玉選）の16場面にわたって説明文を例示するのであるが、紙面の都合上省略する。

7. 制作の前に、前述の各項目の内、自分が設定する事項を１つずつ選んで、下欄（省略）に記述する。

1

2



3

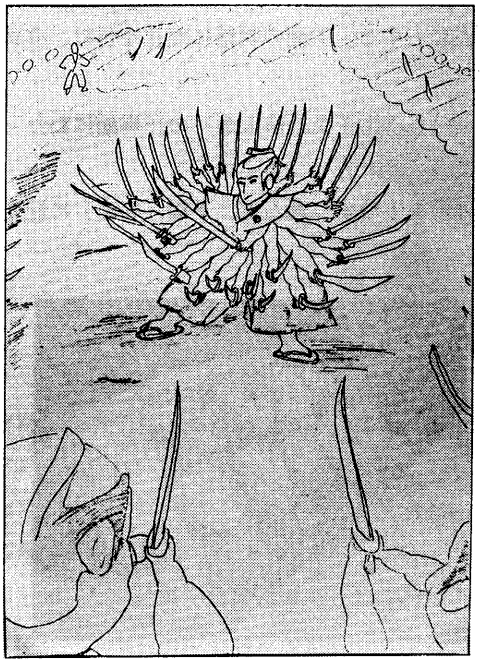
【教材開発９】　空想的人物の表現

［例題１］

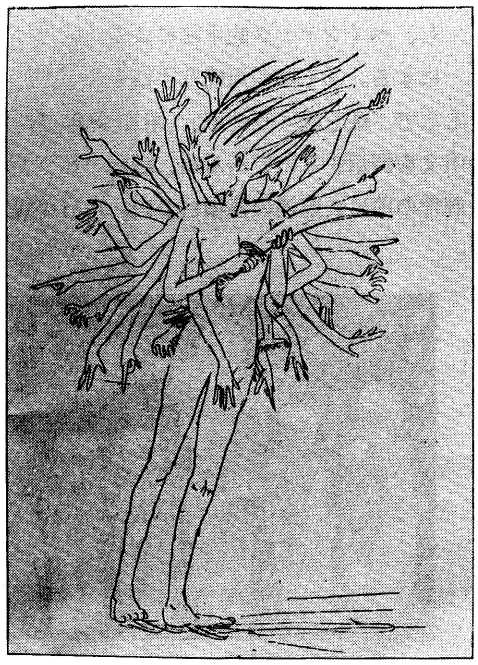
次の創作話に出てくる、空想的人物を黒色各種鉛筆で表現しなさい。

空想的人物が１人立っている。その人物は30本の手を持っている。手の向きは上や下、斜めといろいろな方向に伸びており、また直線的であったり曲線的であるが交錯していない。その人物の手を正面から見ると、後側の手は前側の手に遮られて、一部しか表れていない。それぞれの手の動きや表情にはそれぞれに意味がある。そして、手には何かを持っていたり、持っていなくても、なんらかの意味を告げる表情をしている。

以上造形上の説明をしたが、その空想的人物が何をするのか、何のためにそのような多数の手を持っているのか、性別や意匠、体形、表情、時代、国はどのようなのか等の内容については、各自の空想により創作しなさい。



1



2

［例題２］

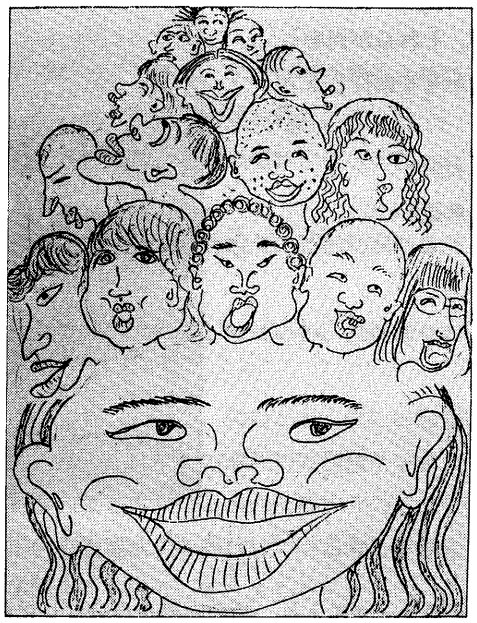
次の創作話に出てくる、空想的人物の頭部を、黒色各種沿筆で下図に表現しなさい。

球状の頭の前半分に、５段にわたって、全部で15の顔を持っている空想的人物がいる。自分の顔も合わせると16である。その表情はすべて違っている。１段目には５つ、２段目には４つ、３段目には３つ、４段目には２つ、５段目には１つ高くなるに従って１つずつ少なくなり、又、小さくなっている。全部で12であるが全て表情が違っている。

頭の上の顔を正面から見ると、真ん中の顔は正面向きに、両脇になるにしたがって斜めや横向きになっている。

以上のことで、形態や位置、大きさ等を表現出来ると思う。

次に、その空想的人物が何をするのか、何のためにそのような頭部をしているのか、性別や時代、国はどうなのか等の内容については、各自の空想により創作しなさい。



［例題３］

中学校男子が、運動会で組体操の塔を完成したところを想定して、その１組を黒色各種鉛筆で線描しなさい。組体操の種目は３重の塔である。下段は５人が肩組をし、２段目は３人である。そして、最上段に１人が手足を広げて立っている。合計９人で行う組体操であるが、前後に人体が重なるので陰になって見えない部分もある。

［例題４］

次のテーマの中、男子は①を女子は②を選択し、黒色各種鉛筆で表現しなさい。どちらのテーマにもその内容に、大きいものと小さいものの対比を考えて表現しなさい。それらが何をしているかは、各自の想像を働かせて創作しなさい。

①「大勢の小人達と１人の大男」

②「１人の美女と多くの小鳥達」

［例題５］

次にあるテーマを選んで、そのテーマにより、話の内容を自分なりに創作してから、黒色各種鉛筆で表現しなさい。男子はテーマ「人魚姫と胴から上が人、下が架空の動物の男」である。条件として、人魚姫と半獣人も一人として、半獣人を主役に据える。女子はテーマ「空に舞い踊る天女達」である。条件として、天女１人を中心に９人の天女が舞っていることとする。

［例題５］

自分の好きな（又は、自作の）詩や俳句、短歌、川柳の中から１分野１題を選択して記述しなさい。その後その内容を黒色各種鉛筆で絵画に表現しなさい。

お わ り に

本論文に掲載した教材開発例を筆者が立案し、学生に順次制作させてきたが、学生の作品や制作態度に次のような変化が見受けられ、効果の一端が伺われた。

① 線描画で線を続けてかけるようになり、表現の慣れや自信が伺われるようになった。

② 画面一杯に内容を表現出来るようになった。

③ 学生の能力に適応する感情や感覚を刺激したので、造形的興味を示し飽きる事無く表現意欲を示すようになった。

④ 教師になったら役立ちそうな教材例と感知したせいか、教材作りの要点やこつを理解しようとする意欲が見られた。

最後に、教材開発をするときの留意点として、次のことを学生に周知させた。

① 絵画指導で行われる教材開発は、子供たちの造形的表現欲求を満たしてやるために行われること。指導者の打ち立てる教材の科学的価値体系を子供に伝授するのではない。子供の感じ方、見方、考え方、表し方を基軸とし、子供の表現欲求を満たしてやる考えを優先しなければならない。この考えを無視すると、子供の主体的表現を疎外してしまうこと。

② 教材開発は子供の主体制、創造性を培うことを目的に行うのである。新しい教材の作り方に専念するという、狭義な方法論的研究に終わらないこと。

③ １時間内に子供が持ち出す問題、悩みは沢山ある。それを全て解決してやるのが教材開発につながるから、この種の研究も、数え切れないほど存在すること。

以 上

［作品を制作した学生名］

教材開発	1	例題	天野富夫
〃	1	例題	荒木千草
〃	2	教師役（記録）	森林美智子
〃	2	生徒役（描画）	諸橋智
〃	3	例題	寺崎智子
〃	4	例題　1－1	五伝木浩樹
〃	4	例題　1－3、4	天野富夫
〃	4	例題　2	和田みゆき
〃	4	例題　3	野口純子
〃	4	例題　3	安立洋子
〃	5	例題	佐藤直子
〃	5	例題	本間稔浩
〃	6	例題　1・2	内山祐一

〃	7		大原有喜
〃	8	1	藤澤康子
〃	〃	2	佐藤悦子
〃	〃	3	斉藤美子
〃	9	例題 1—1	太田正
〃	9	例題 1—2	嘉代綾子
〃	9	例題 2	小崎加奈子
〃	9	例題 3	五伝木浩樹
〃	9	例題 4	植木正子
〃	9	例題 5—左	丸山浩一
〃	9	例題 5—右	増田美和子